

利用者の個別性に合わせて考案した日常生活用品、  
介護用品 訪問看護の現場で工夫した事

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): visiting nursing, innovative tools and devices, quality of life 作成者: 小川, 朝恵, 鈴木, 剛, OGAWA, Asae, SUZUKI, Tsuyoshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.50818/00000020">https://doi.org/10.50818/00000020</a>

## 【実践報告】

## 利用者の個別性に合わせて考案した日常生活用品、介護用品 ～訪問看護の現場で工夫した事～

Tools and devices for daily life and nursing care developed to meet the individual needs of users  
- Measures implemented at the site of visiting nursing -

小川 朝恵<sup>1</sup> 鈴木 剛<sup>2</sup>  
Asae OGAWA Tsuyoshi SUZUKI

### 要 旨

健康問題や生活障害を抱えながら在宅生活を送っている方々の多くは、生活上の不自由や不便を感じながら生活している。その方々のそばに寄り添っている訪問看護師が生活上の課題に目を向け解決すべく力を発揮する事により、生活の質は向上し介護負担は軽減される。訪問看護ステーションで働く中で、訪問看護師が直面した利用者様やご家族の個別の困りごとや生活障害に対して、少しでも快適に便利に生活してもらいたいという思いで考案した作品と困りごとを解決するために利用者様やご家族と協働して工夫した作品、ケアの工夫について報告した。

キーワード：訪問看護、用具の工夫、生活の質

### I. はじめに

在宅看護は、人々が生活している居宅において看護を提供し、予防から健康の維持回復をめざすケア、そして安らかな死に至るまでの終末期ケアと幅広い健康レベルの方々を対象にしている。また、生活環境や経済力、家族の介護力も千差万別であるためその個別性に合わせて使用する衛生材料や物品、介護用品にも工夫が必要となる。平成11年から訪問看護に携わり、実践する中で考案した介護用品や日常生活用品とケアの工夫の実際を報告する。

### 1. 方法

- 1) 実施施設 訪問看護ステーション 利用者 50名  
職員体制 訪問看護師常勤4名 非常勤2名 事務員1名
- 2) 実施期間 平成25年4月～平成29年9月 各作品により使用期間が異なるため下記に個別に記載した。  
考案した3) 作品の紹介、4) 使用用途と作成方法の工夫とポイントに分けて表記する。

### 3) 作品の紹介

#### ①タオルベスト

(使用期間 平成26年7月～平成29年9月)

#### ②テープかぶれを予防する「胃ろうチューブ固定ベスト」

(使用期間 平成25年4月～平成26年6月)

#### ③紙おむつを加工した「パット」

(使用期間 平成26年4月～平成29年9月)

#### ④子供服を再利用した「ウロガードカバー」

(使用期間 平成28年6月～平成29年9月)

#### ⑤創部の状態に合わせた衛生材料の形成方法

(使用期間 平成28年分年3月～平成28年12月)

#### ⑥市販の紙マスクを利用した「気管切開部からの感染予防マスク」

(使用期間 平成28年12月～平成29年9月)

#### ⑦気管切開部を素敵にカバー「手ぬぐいスカーフ」

(使用期間 平成28年5月～平成29年9月)

### 4) 使用用途、作成方法と工夫のポイント

#### ①タオルベスト

##### ○使用用途

・事例 A 80代 男性

尋常性乾癬で背部にワセリンとステロイドの混合軟膏を塗布しているケース。油性の汚れが下着に付くのを防ぐ。

<sup>1</sup> 大坪会東和病院訪問看護ステーション

<sup>2</sup> 東都医療大学研究センター

E-mail: towahoumonk@towa-hp.jp

○作成方法と工夫のポイント

日頃使用しているフェイスタオルを半分の折り、シャツの襟ぐり状にカットし、切り口が解れない様にかがり縫いをする。

(1頁 写真①-1, 写真①-2, 写真①-3を参照)

②テープがぶれを予防する「胃ろうチューブ固定ベスト」

○使用用途

・事例B 50代 女性

胃がん末期で幽門狭窄があり、永久的に胃ろうチューブを挿入して排液をする必要のあるケース。腹部に胃ろうチューブをテープ固定しているため、テープがぶれの予防に使用する。

○作成方法と工夫のポイント

①で作成したタオルベストと同じサイズに生地をカットして合わせて縫う。胃ろうチューブの出口を作り、100円ショップで購入したマジックテープを縫いつける。胃ろうチューブをベストの上から通し、マジックテープで貼り付けて固定する。

(1頁 写真②-1, 写真②-2, 写真②-3, 写真②-4を参照)

③紙おむつを加工した「パット」

○使用用途

・事例C 80代 女性

仙骨部に皮下組織を超える損傷の褥瘡があるケース。メロリンガーゼやモイスキンパットが必要であるが、特定保険医療材料には該当せず、また在宅医療で汎用される衛生材料として払い出されたが、数量に限界があり自費購入が必要であった。利用者の経済的負担を最小限にするために作成した。

○作成方法と工夫のポイント

紙おむつを必要な大きさにカットして、切り口をテープで止める。紙おむつをカットする事で切り口からポリマーが出てしまうため、切り口をしっかり止める必要がある。使用するテープは、アルケアのシルキーポアが最適であった。創状態によっては、生理用ナプキンなども効果的に利用できる。

(1頁 写真③を参照)

④子供服を再利用した「ウロガードカバー」

○使用用途

・事例D 70代 男性

脊髄損傷により膀胱直腸障害を併発し、バルンカテーテルを挿入した状態で在宅生活を送っているケース。ウロガードが見えない様にして外出をサポートする。

ウロガードカバーは尿汚染しやすく、頻回に洗濯する必要があるため、取り替え用のカバーが必要になる。

○作成方法と工夫のポイント

介護用品カタログにもウロガードカバーは掲載され販売されているが、古着屋で子供服を購入すれば安価でオリジナル感がある。また、お孫さんがいればお下がりを再利用する事も出来る。

(2頁 写真④を参照)

⑤創部の状態に合わせた衛生材料の形成方法

○使用用途

・事例E 60代 女性

乳がんの皮膚移転により、胸部全体に皮膚自壊があるケース。自壊部の処置に市販の衛生材料の使用では、対応困難であったため、利用者の状態に合わせて衛生材料を形成した。

○作成方法と工夫のポイント

市販の滅菌されたモイスキンパットは、最大で15×30cmのサイズである。そのため、創部の状態に合わせてモイスキンパットをカットし繋ぎ合わせた。繋ぎ合わせるために紙テープを使用すると粘着力が弱く、動いていると接着面が剥がれてしまった。色々な医療用テープを試したがどれも同様であった。そこで、布製のガムテープを使用したら上記の問題が解決出来た。

(2頁 写真⑤-1, 写真⑤-4を参照)

⑥市販の紙マスクを利用した「気管切開部からの感染予防マスク」

○使用用途

・事例F 60代 男性

食道がんの手術後に永久気管口を造設したケース。出来るだけウイルス感染が予防出来るように使用した。

○作成方法と工夫のポイント

市販の使い捨てマスクの下方のゴムを左右ともにカットする。カットしたゴム同士を結ぶ。

(2頁 写真⑥-1, 写真⑥-2, 写真⑥-3を参照)

⑦気管切開部を素敵にカバー「手ぬぐいスカーフ」

○使用用途

・事例F 60代 男性

外出時にスカーフやアスコット・タイを利用していたが、排痰による汚染で頻回に洗濯する必要があるため、何か代わりにするものはないか検討した。

○作成方法と工夫のポイント

気軽に洗濯出来て、おしゃれに見えるものはないかを探した。浅草には、海外旅行者向けの江戸柄の手ぬぐいが、1枚500円で購入出来る。首に巻くとおしゃれな感じになり、気軽に洗濯ができ清潔である。

(2頁 写真⑦を参照)

## 2. 結果

使用した結果、評価や今後の改善点に分けて表記する。

### ①タオルベスト

#### ○使用した結果

##### ・事例 A 80代 男性

軟膏を塗布した後にタオルベストを着用してもらったが、タオル地ではゴロゴロして着心地が悪い、両サイドが固定されないと上方にすり上がってしまうという問題があった。しかし、介護者側からすると今までは軟膏塗布後にガーゼハンカチを背部にあてていたが、すぐにずれて腰のあたりまで落ちてしまう。シャツは軟膏の油でベトベトになってしまい家族の洗濯物と一緒に洗えない状態だったので、タオルベストの使用は喜ばれた。

#### ○評価や今後の改善点

使用する生地を手ぬぐいやガーゼタオルに変更してみた。手ぬぐいやガーゼは解れやすいため、切り口にバイアステープを縫い付けた。自分で着脱が出来るように両サイドにゴムを取り付けて頭から被れるタイプと両サイドにマジックテープを取り付け自力で留め易くしたものを作成し、試してみると利用者にも好評であった。

(2~3頁 写真①-4, 写真①-5, 写真①-6を参照)

### ②テープかぶれを予防する「胃ろうチューブ固定ベスト」

#### ○使用した結果

##### ・事例 B 50代 女性

胃がん末期の状態で永眠されるまでの1年4ヶ月の間、胃ろうチューブを挿入していた。使用する固定テープにも配慮はしたが、ADLが自立している間は胃ろうチューブ固定ベストを使用して、皮膚トラブルを起こす事なく過ごせた。胃ろうチューブを固定するために使用する生地は、厚めでなければ固定強度が維持できないため、夏期は暑さのため着用できなかった。また、病状悪化に伴い寝たきり状態になると更衣させるのに苦労した。

#### ○評価や今後の改善点

病状悪化に伴い、臨死期近くになると寝たきり状態になることは十分に予測できたため、左右の肩に切り込みを入れてマジックテープで開け閉めできるように工夫する必要があった。また、季節に合わせて使用する生地を検討しつつ固定力が低下しない方法を考慮する必要もあった。

(3頁 写真②-5を参照)

### ③紙おむつを加工した「パット」

#### ○使用した結果

##### ・事例 C 80代 女性

全身状態の悪化に伴い、褥瘡の完全治癒は認められなかったが、少しずつ改善する時期もあった。また、感染兆候は見られずに経過した。

#### ○評価や今後の改善点

紙おむつパッドは、担当の訪問看護師が中心になり作成していた。訪問看護のケア提供中には作成する時間がないため、事務所に持ち帰り時間外に作成していた。そのため、担当する訪問看護師の負担が大きかった。しかし、紙おむつは要介護状態により、自治体から給付が受けられるため利用者の経済的負担は最小限にできた。

### ④子供服を再利用した「ウロガードカバー」

#### ○使用した結果

##### ・事例 D 70代 男性

外出時に声をかけられ「かわいいですね」と褒められた。外出の機会が増えて、ウロガードカバーをきっかけに人と話をする機会も増えた。

#### ○評価や今後の改善点

手間がかからず古着がそのまま利用でき、汚れても簡単に洗濯が出来る。ウロガードの大きさや形に合わせて、子供服を選択すれば外出時に楽しめる。

### ⑤創部の状態に合わせた衛生材料の形成方法

#### ○使用した結果

##### ・事例 E 60代 女性

市販のモイスキンパットを繋げるには、布製のガムテープが最適であった。残っていたテープも活用してみたが、浸出液の重みで繋ぎ目がはがれる事はなかった。また、二次的な皮膚トラブルを予防するため、早期からスミス&ネフューのオプサイドジェントルロールをご本人とご家族に相談して使用していた。その結果、テープかぶれによる皮膚トラブルは見られなかった。

○評価や今後の改善点

布性ガムテープの使用は、見た目が気になったが繋ぎ目が剥がれない事を最優先した。シャワー浴介助をしながら、モイスキンパットを形成する作業は労力を使ったが、利用者が胸に充てているパットの事を気にせず、毎日の日課であるラジオ体操を続ける事ができた。

(3頁 写真⑤-2, 写真⑤-3, 写真⑤-5を参照)

⑥市販の紙マスクを利用した「気管切開部からの感染予防マスク」

○使用した結果

・事例F 60代 男性

インフルエンザや感冒が流行する時期には必ずウイルス除去タイプの紙マスクを着用し、10ヶ月間感染症を併発していない。

○評価と今後の改善点

ウイルス除去機能の高い紙マスクを上手く利用出来た。利用者の感想では、気管口にマスクが吸い付く事があるので、息苦しく感じる様である。状況を見ながら取り外ししながら現在も使用している。

⑦気管切開部を素敵にカバー「手ぬぐいスカーフ」

○使用した結果

・事例F 60代 男性

高価なスカーフやアスコット・タイより、安価な手ぬぐいの方がおしゃれて、衛生的であるため使用頻度が高かった。

○評価と今後の改善点

気管切開部に充てていても息苦しさを感ぜなくて良かった。何より気兼ねなく洗濯出来るのが良い。

族の方々と一緒に工夫し解決できるとその人の生活の質は向上し、ご家族の介護負担は軽減する。病気や障がいがあっても住み慣れた自宅で生活するその人を支えている訪問看護師だから、個別性に合った衛生材料や物品、介護用品にこだわっていきたい。

文献

- 1) 秋山正子, 安藤真知子, 大島浩子ら:「在宅医療と訪問看護のあり方検討会」  
～在宅医療をはじめの方へ～ 訪問看護活用ガイド改訂版 2014年6月発行
- 2) 株式会社 日本ドライ:介護用品レンタル・販売カタログ介護用品のスマイルVol. 8
- 3) 株式会社 光洋:メディカルスマイル 医療用品お届けブック Vol. 7
- 4) 公益社団法人 東京都薬剤師会:見てみよう特定保険医療材料～保険薬局で交付できる特定保険医療材料と在宅医療で汎用される衛生材料の概要～ 平成27年3月発行

受付日:2017年10月3日 受諾日:2018年1月10日

Ⅱ. 考察

病気や障がいがあっても住み慣れた自宅で自分らしく過ごしたいと思う人は、年々増え在宅療養に移行する人が増加する中、福祉用具、介護用品、医療材料も日進月歩で開発工夫されて使い勝手の良いものがたくさん作られている。医療用品カタログを見ても以前にくらべるとその人の障がいに合わせた便利用品が多く商品化し、紹介されている。日々、看護する中で「こんな物があったら便利なのに」「この商品はとても良いがもっと・・・だったら」と感じる事も多い。訪問看護師は、生活する人を近くで見守り看護しているからこそ気づき、そこからアイデアが浮かぶ。そのひらめきを形にして個々の生活上の困りごとをご本人、ご家

【Practice Report】

# Tools and devices for daily life and nursing care developed to meet the individual needs of users - Measures implemented at the site of visiting nursing -

Asae OGAWA<sup>1</sup> Tsuyoshi SUZUKI<sup>2</sup>

## Abstract

Many people with health problems or disabilities living at home feel that in the course of daily life they face a variety of problems and inconveniences. By focusing on issues of everyday life and making every effort to find solutions, visiting nurses who are close to these people are improving their quality of life and reducing the burden of care. While working at a visiting nurse station, visiting nurses are confronted with the individual problems of users and their families. This is a report of innovative tools and devices for nursing care developed with the cooperation of users and their families to help those receiving care overcome daily obstacles and enjoy more comfortable, more convenient lives..

Key words : visiting nursing, innovative tools and devices, quality of life

